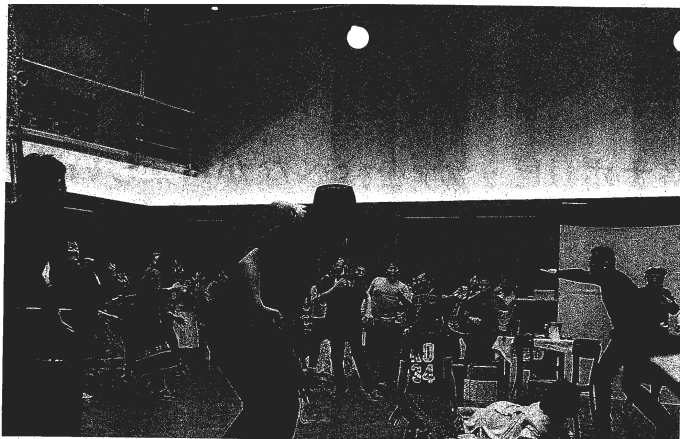


劇場の熱気街につなげ



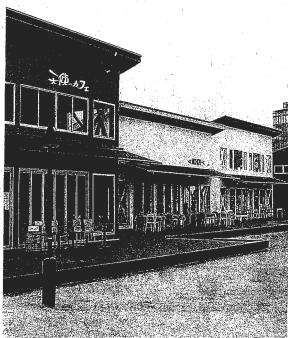
3月に入り春の陽気に吹く風は、もかきに春の陽気が感じられるが、びわ湖ホールは2階はすでに夏の熱気を帯びてきた。開演前、オペラの自主制作にこだわる内外の芸術家が集う。13、14日に歌劇「ボエーム」の本番を迎えたホールを訪れた。



●何度も同じシーンが繰り返されるけど、ホモキさん(右)のユーモアに歌いながら時折笑い声も漏れる
 ●カフェから眺める琵琶湖の光景に「まるで海外のリゾート地にいるような気分」という声も寄せられる。いづれも大津市打出浜

活気づくりテラスが一役

新報



りて手本を見せる。通訳が間に入るが、歌い手に日本語を伝える間もなほの勢いで、何度も言葉止め、繰り返される言葉は日本語で「タマタマ」。上演時間1時間50分の作は、が、準備の心算をすて1時間以上を費やした。

「ホモキ演出は台詞で動きが細かくて、いかに「ホモキ」ル事業の村野美津さん。かつての体格の歌が手に入らなび、自分の声を朗々と響かせる。そんなスラのイメージとは無縁の舞台。

ウィーン国立歌劇場、パリ・オペラ座を舞台の流れるような



に位置し、独特の存在感がある。だが、びわ湖ホール周辺も人通りも少ない。全副帯でさむじにまわしをへり出すと、昨秋から「びわ湖大津」の営業を始めた、他のホールや音楽団体の声も、秋の風物詩「大津」に合わせた催しの開催を始めた。

好例を生み始めた。大津市の中心市街地活性化基本計画の一環、ホール横にカフェテラスが完成。音楽団でマ野美津さん、本報「タマリ」を築き、4店舗が昨年4月に開店した。中心市街地活性化を進める「まちづくり大津」にも、産の来客者を年間7万人とした当初目標は年々達成。年度末は11万5千、12万人になる見込み。県外から足を運ぶ人も多く、大半は女性。

「開演前の入り口からホールに足を運んでみる。カナルが話し込み、家族連れが大どんでん。開演前の琵琶湖を前に、時間あつたも流れてきた。(前久酒)

美しい眺めで飲食、女性客に人気

利用者数を公表した大津市は、なぎさのテラス(大津市打出浜)



琵琶湖の眺望を楽しみながら飲食できる大津市打出浜の「なぎさのテラス」の利用者が、年間7万人の男を大きく上回り、2月末現在で11万6千人に達していることが、同市のまとめで分かった。市は「美しい眺めが評価された結果」としている。

大津・なぎさ公園

年間 7万人の目標上回る

「なぎさのテラス」は、市の中心市街地活性化基本計画の核事業として、官民が出資する株式会社「まじゅく」が大津市がびわ湖ホール西側のなぎさ公園内に整備し、昨年4月23日オープンした。ウッドデッキでつながった木造1〜2階建ての4棟に、イタリア料理店やカフェなど4店が入居している。

市によると、当初計画の年間7万人は、1月下旬に突破し、利用者数は順調に伸びているという。琵琶湖や対岸のマシオン群、比叡山など、眺めの良さと、県外でも飲食ができることが評価されているとみる。

昨年1月に実施したアンケート調査は、利用者の8割が女性。年齢別では、20〜30歳代が最も多かった。グループでの利用が多く、全体の利用率が倍以上の利用者だった。市は、年間利用者数は13万人、経済効果は億円を見込んでいる。森浦成徳

大津市が昨年4月末に同市打出浜の琵琶湖岸に開設した「なぎさのテラス」が人気を呼んでいる。イタリア料理店など4店が軒を連ね、来場者も当初の年間見込みの7万人を5カ月で突破。2月末現在で1.8倍の11万6000人に達している。市は「予想以上の来場者 予想の倍に



琵琶湖を一望できる「なぎさのテラス」

イタリア料理など4店
 なぎさのテラス
 客足快調

成功。ここから中心街に人の流れがでければ」と話している。テラスは中心市街地活性化基本計画の一環。市都市再生課によると、客の8割が女性で、平日は電車で来る中高年の女性グループが常連になっている。週末は家族連れが目立ち、テラス横の市営駐車場の利用台数も、今年度は2月末で約5万9000台と前年度同期より56%増えた。同テラスの喫茶店「シヨコラ」の藤野芳徳店長(48)は「平日の来客数も思っていた以上。ただ、天候が悪ければ客足が遠のくこともあるので油断はできない」と話している。

【稲生陽】

特産品味わう「湖の駅」

本報

琵琶湖汽船（大津市）は20日、大津市浜町の「浜大津アーカス」内に、県内の特産品を購入したり、その場で味わえる「湖の駅」をオープンする。週末には朝市も開かれる予定で、県内の新たな観光拠点として人気を集めそうだ。

20日、「浜大津アーカス」に開店

京阪浜大津駅や幹線道路に隣接する交通の便の良さを生かして、地元の特産品を県内外にアピールし、地域活性化に結びつけるのが狙い。観光客が琵琶湖を起点に県内各地を訪れてほしいとの願いを込めて「湖の



20日にオープンする「湖の駅」の完成イメージ
＝琵琶湖汽船提供

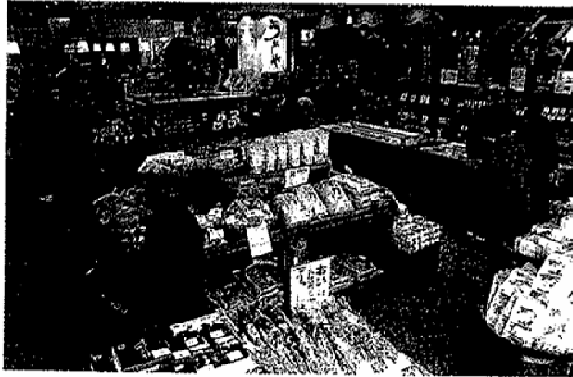
駅」と名付けた。物産コーナーでは、無減農薬で栽培された近江米や茶、農産物のほか、銘菓など200品以上を品ぞろえ。県内各地の30以上の蔵元から仕入れた地酒も並べらる予定。隣に設けられる飲食コーナーでは、近江牛や赤こんにゃくなど地元の食

材を生かした定食を味わうことができる。また、土日や祝日には地元の新鮮な野菜や果物、水産加工品を屋外で販売する「朝市」も開かれる。琵琶湖汽船は「滋賀県のこだわりの食材をそろえた。地元産の食の魅力を再発見してもらえたら」とPRしている。

中日新聞

「湖の駅」で活気戻れ

県内の特産品を取りそろえた「湖の駅」が20日、大津市浜町の浜大津アーカス2階に開店した。物販コーナーやフードコートを設け、新たな観光スポットとして期待がかかる。



県内の特産品を取りそろえた「湖の駅」が20日、大津市浜町の浜大津アーカス2階に開店した。

中 浜大津にオープン

近江米や地酒、武将グッズ販売

県内の特産品を取りそろえた「湖の駅」が20日、大津市浜町の浜大津アーカス2階に開店した。物販コーナーやフードコートを設け、新たな観光スポットとして期待がかかる。

かつて宿場町の水運拠点だった浜大津周辺のにぎわいを取り戻そうと、琵琶湖汽船(大津市)が開業。道の駅のように地元産の商品を販売する場所として、県の象徴である琵琶湖をモチーフに、無農薬の近江米や地酒、ふなずし、近江牛のレトルト商品、琵琶湖のヨシから作った紙、近江ゆかりの戦国武将グッズなど、二百品以上を販売。フードコートでは、近江米や地元野菜を使った食事を提供する。年中無休で、営業時間は午前10時～午後10時。土曜と祝日は近くで朝市を開き、県内の農家や漁業者が、とれたての野菜や魚介類を販売する。今年の夏には琵琶湖に開業予定のアウトレットパークで、二層店の開店を予定している。

読売新聞

「道の駅」ならぬ「湖の駅」が20日、大津市浜町の商業施設「浜大津アーカス」2階にオープンした。江戸時代には「大津百町」と呼ばれた市中心部の活気を取り戻そうと、大津港に本社を置く琵琶湖汽船が手がけた。近くには、4月の再開館を目指し、改修工事が急ピッチで実施されている「旧大津公会堂」や、屋外カフェ「なぎさのテラス」があり、同社は「他の施設と連携し、街づくりに貢献したい」としている。

大津港に「湖の駅」 名産販売や特産品飲食

市の中心市街地活性化基本計画のプロジェクトの一環で、同社が地元の商店街などと協力して設置。午前10時～午後10時に営業し、近江米や地酒、茶などの名産を販売するコーナー(93平方メートル)や、地鶏やセタシジミなどの特産品を食べられる食事スペース(36席)などを備え、県内の観光情報も発信する。週末や休日には、地元の農家らの協力を得て、新鮮な野菜や果物、川魚の加工品などを対面販売する「朝市」も琵琶湖を望めるデッキで催す予定。20日に開かれた完工式で、同社の中井保社長は「集客、交流機能を強化し、浜大津を活性化させたい」と力を込めた。

式後には、さっそく大勢の市民らが訪れ、商品など手にした。同市桜野町、無職畑井孝夫さん(85)は「地元でも食べたことがないものが並んでいる」と喜んでた。



大勢の客でにぎわう「湖の駅」 浜大津

毎日新聞

オープンした湖の駅で、品定めする家族連れ

大津 県内の特産品を「カス」の壁にオープンし、多く訪れる「湖の駅」が、くらの観光客や家族連れが訪れる。運営する琵琶湖汽船の石

特産品ズラリ

黒一典マニッジャーは「市中心部のにぎわい復活として、琵琶湖を生かすまちづくりを進めたい」と話す。

市内には地元産の米や酒、ふなずしなどの水産加工品、県内の産物を使った菓子など、200種類以上の特産品がズラリ。近江米や地元野菜を使った「近江商人膳」(650円)など食事もできる。家賃を払った大津市田辺町、浜大津アーカス

パート従業員、辻彩子さん(47)は「地元の味が気軽に手に入る。県外への贈り物もここで選べたい」と笑顔で話す。スタッフの田中恵理香さん(30)は「開店1時間ほどで売り切れた商品もあり、感謝のスタンプが切れた」と話している。営業時間は午前10時～午後10時。問い合わせは、077-526-6286。

【前本麻有】

湖の駅オープン 200種以上

「湖の駅」オープン BBC

大津市中心部を活性化させようと、浜大津地区にある施設の中に、県内の特産品の販売などを行う「湖の駅」がオープンしました。大津市の浜大津アーカス内にオープンしたこの「湖の駅」は、観光客にびわ湖を拠点に県内各地を訪れてもらおうと、琵琶湖汽船がオープンしたものです。2階にオープンした湖の駅には、県内の地元で産られた地酒や、県内産の米などを販売する物産コーナーが設置されています。また同じフロアには観光情報を手に入れることの出発スペースや、フードコートなども設けられていて多くの家族連れらが訪れていました。

NHK

浜大津に「湖の駅」オープン

NHK

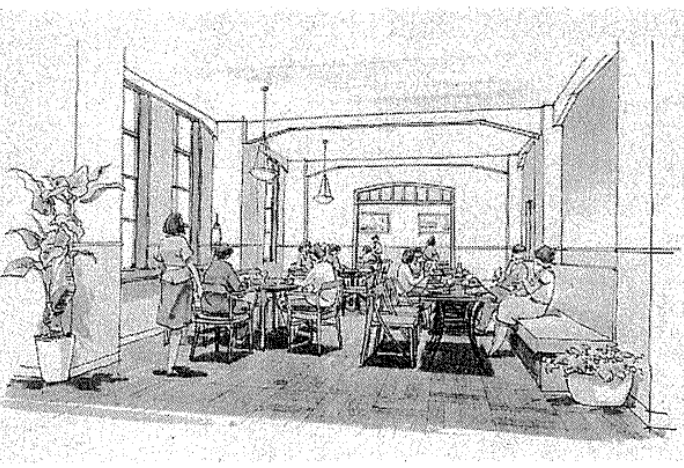
近江米やふなずしなど、滋賀県の特産品の販売や周辺の観光案内を行う「湖(うみ)の駅」と名付けられた施設が、大津市中心部のびわ湖岸にオープンしました。

「湖の駅」は大津市中心部の活性化を図ろうと、地元の企業が大津市などと連携して、びわ湖岸の商業施設の中につくったもので、きょうは、大津市や企業の代表者がテープカットをして開店を祝いました。店内には、近江米やふなずし、びわ湖の魚のつくた煮といった滋賀県の特産品のほか、県内で生産された地酒やみそ、それにお茶などが並べられ、訪れた人が早速買い求めていました。また、近江牛の焼き肉を近江米のごはんと一緒に食べられるコーナーも設けられており、買い物客が近江牛をおいしそうに食べる姿も見られました。このほか、町家のたたずまいが色濃く残る大津市中心部を紹介する観光案内コーナーも設置され、今後、町歩きを楽しむ拠点としての利用も期待されています。「湖の駅」は、年中無休で、午前10時から午後10時までオープンしています。

<第三種郵便物認可>

4月オープンの旧大津公会堂

欧風料理店など4店入居へ



リニューアル後の旧大津公会堂のイメージ図

大津市は8日、第3セクター「まちづくり大津」が「進めている中心市街地活性化の一環として4月にオープンする旧大津公会堂（大津市浜大津）のテナントについて、近江牛の洋食店や、欧風料理店など4つの飲食店が入る見通しであると発表した。昭和9年に建設された国内最古の公会堂はレストラン・ビルとして生まれ変わることになる。

テナントは地下1階と1階に各2店。近江牛を用いる洋食店、欧風料理店、和洋創作料理店やイタリア料理店が入る。いずれも具内業者で、ランチは800円～3500円、ディナーは3000円～8000円程度になる予定。テナントは昨年6月から募集。周辺企業のビジネスマンを主なターゲットにし、ディナーなどは接待の場としても使用できるクラスのお店として4店を選んだ。旧大津公会堂は今年度予算約3・3億円で3月末まで改修を進めており、4月中にはオープンする。

貸しホール、近江牛グリル入居

旧大津公会堂再生大詰め

大津市浜大津1丁目の旧大津公会堂（市社会教育会館）の改修工事が大詰めを迎えている。建設時の昭和初期のモダンな雰囲気再現し、耐震補強やバリアフリー化を図った。4月下旬から、飲食店と貸し館としての利用が始まる。

建物は鉄筋コンクリート造りで、地上3階地下1階、高さ約18メートル、延べ約4月下旬から利用

建設時のモダンな雰囲気を再現し、耐震補強やバリアフリー化で生まれ変わる旧大津公会堂—撮影・梶田茂樹



昭和の雰囲気残す

1600平方メートル。昨春に始まった工事は、外観の特徴でもある外壁のスクラッチタイルの6割に建設当初のものを再利用し、残りは特別注文した信楽焼のタイルを使った。アーチ型の窓を補強して残し、エレベーターとスロープを新たに設置した。

完成後は3階をホールとして貸し出し、2階は会議室や多目的室とする。いずれも天井のしっくいを塗り直し、床は板張りにして昭和の雰囲気を保った。1階と地下1階は、イタリア料理、近江牛グリル、創作料理、地中海料理の4店舗が入居する。

同公会堂は、1934（昭和9）年、商工会議所と図書館を併設した大津公会堂として開設。戦後は公民館として利用された。老朽化が進んだが、2003年に地元住民団体が保存を求め、市が再利用を決めた。市の景観重要建造物で、市はさらに国登録文化財への申請を計画している。

（箕浦成克）

旧大津公会堂に入るテナント

伊料理店など4店に

【大津】中心街の「大津」にぎわい拠点として4月下旬にリニューアルする旧大津公会堂（大津市浜大津1-1）について、大津市はこのほど、テナントとして本格イタリア料理店など4店の開店が決まったと発表した。価格は昼食で平均1500円前後から、夕食は平均4000円からと周辺よりやや高めだが、建物の知名度もあり観光拠点の一つになりそうだ。

1954年完成の同建物はタイル張りの装飾的な外観から市民の人気も高く、近く景観重要建造物に登録される見込み。昨夏から市

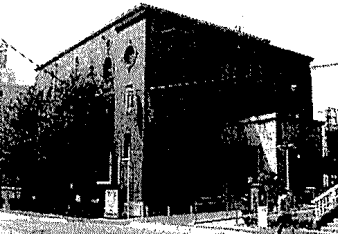
料理店「Ristorante LAGO」がそれぞれ30〜45席ほど設け、最も遅い店は午前0時ごろまで営業するという。同市都市再生課は「観光客を湖畔から中心街に引き込むことができれば、周辺はオフィスも多く平日の需要も高いはず」と話している。

【稲生 徳】

飲食4店舗入居

旧大津公会堂 報知新聞は、地中海料理とワイン・紅茶のレストラン▽創作和洋食▽近江牛のグリル&バー▽イタリア料理の四店舗。改修中の旧公会堂のオープンは四月下旬の予定。昭和九年に建設された建物は、鉄筋コンクリート造、地下一階、地上三階、延べ床面積千六百平方メートル。

大津市が、集客・交流の拠点としてリニューアル工事を進める旧大津公会堂（京阪浜大津駅徒歩一分）に入居する飲食店を決めた。周辺にはオフィスビルが多く立地することから、ランチタイムにぎわいとともに、夕方から夜にかけての集客も図る。入居するテナ



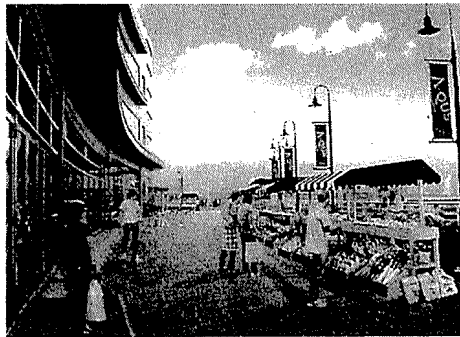
H22年3月4日報知新聞

浜大津ににぎわいを

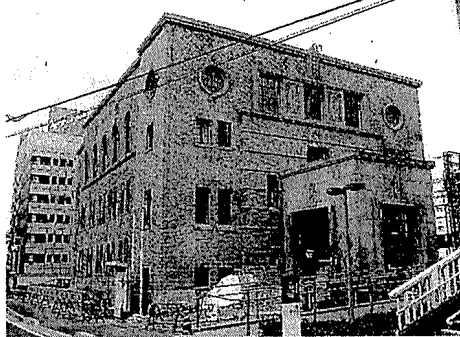
拠点施設 今春相次ぎオープン

大津港周辺にこの春、観光客を呼び込む拠点施設が相次いでオープンする。大津湖畔なきさ公園にある屋外カフェ「なきさのテラス」に次ぐもので、市が取り組む中心市街地活性化基本計画の柱のプロジェクト。かつて琵琶湖の水運の拠点として栄えた浜大津ににぎわいは復活するか――。

（日比野容子）



浜大津アーカスのデッキで開催予定の朝市のイメージ。琵琶湖汽船提供



外装工事をほぼ終えた大津市社会教育会館（旧大津公会堂） 大津市浜大津1丁目

るほか、食事スペースもある。土日・祝日には、とれたての農産物や水産物を販売する「朝市」を琵琶湖を望むデッキまで催す予定だ。同社企画部は「観光客の立ち寄りの場として、中心市街地ににぎわいを創出することに貢献したい」とする。一方、れんが造りのモダンな雰囲気でも市民に愛され、映

朝市や飲食店、観光客の回遊期待

面やドラマのロケにも使われた同市浜大津1丁目の市社会教育会館（旧大津公会堂）が4月下旬、改装オープンする。1934（昭和9）年の完成で、地下1階地上3階建て。屋根を軽くし内部の壁を増やして耐震補強したうえで、外壁の汚れを落とすなどして生まれ変わらせた。地下1階と地下2階には近江牛やイタリア料理などの飲食店4店が入り、昼から営業する。周辺には滋賀銀行やNTP（西日本）などのオフィスビルが集まり、特に昼食時の飲食施設が不足していた。午後1時まで営業し、夜の集客も狙う。一方、2、3階はホールや会議室を備えた交流施設として市民に開放する。市は今後、国の登録有形文化財への指定を申請する予定だ。

県内で初めて認定された市の中心市街地活性化基本計画は、JR大津駅・浜大津・琵琶湖畔・びわ湖ホール・膳所への観光客や市民を回遊させるのが目標だ。関係者は「にぎわいの創出に向けて、重点が練になりつつある」と期待を込める。

H22年1月16日読売新聞

欧風料理店など入居4店舗内定

4月の再開館を目指して改修が進められている大津市浜大津の市旧大津公会堂（旧・社会福祉会館）に入居する飲食店が、ほぼ決まった。近江牛の専門店やイタリアン料理、欧風料理、和洋創作料理の4店舗になる見込みという。

旧大津公会堂は地上3階・地下1階建てで、昭和初期の1934年に完成している。

欧風料理店など入居4店舗内定 旧大津公会堂 4月の再開館を目指して改修が進められている大津市浜大津の市旧大津公会堂（旧・社会福祉会館）に入居する飲食店が、ほぼ決まった。近江牛の専門店やイタリアン料理、欧風料理、和洋創作料理の4店舗になる見込みという。旧大津公会堂は地上3階・地下1階建てで、昭和初期の1934年に完成している。

